

富山大学人文学部令和4年度卒業論文

中高等学校生活における「オタク」

富山大学人文学部人文学科  
社会文化コース社会学分野  
学籍番号 11910151  
氏名 宮崎遼人

## 目次

第1章 問題関心	1
第2章 先行研究のレビュー	2
第3章 調査	
第1節 調査概要	4
第2節 インタビュー어의プロフィール	4
第4章 分析	
第1節 オタクの定義・境界線	5
第2節 スクールカーストの状況	6
第3節 オタク趣味が友人形成に及ぼした影響	7
第4節 オタク趣味について他人と語り合いたいという欲求	8
第5節 オタクグループ内部の序列関係	9
第6節 オタク趣味の開示状況	9
第7節 オタク趣味を隠そうとする意識	10
第8節 文化の媒介者	12
第9節 「オタク」に対する意味付けの変化	12
第5章 考察	
第1節 「オタク」概念の境界線	15
第2節 スクールカーストの実在性	15
第3節 「オタク」のスティグマ化	16
注	18
参考文献	18

## 第1章 問題関心

オタクの語源は1983年にコラムニストの中森明夫がSFやマンガ、アニメなどのファンがお互いを「おたく」と呼び合っていた現象を揶揄したことがきっかけであり、サブカルチャー（アニメ、マンガ、ゲーム、鉄道、アイドル etc.）に熱中している人々を指す言葉として世間一般に広まった。

1989年の連続少女誘拐殺人事件の犯人として逮捕された宮崎勤被告の自室に6千本に及ぶビデオテープと大量のマンガ本が積み上げられていた様子がマスコミによって繰り返し報道された結果、一部のサブカルチャーの中でのみポピュラーな呼称であったオタクという表現は社会的に異質な存在として強烈に焼き付けられ、「オタク」のステレオタイプが決定的に定づけられることとなった。

しかし、90年代初頭以降、オタクは単なる差別語ではなく「こだわりを持った消費者」という経済的要因から再評価される動きが一般社会に出てきたと同時に、オタクの大衆化とそれによる概念自体の変容が生じた、と菊池（2000）によって指摘されている。菊池によれば、アニメ映画『もののけ姫』（スタジオ・ジブリ）や『新世紀エヴァンゲリオン』（ガイナックス）が大ヒットし、オタク文化が量的に拡大し敷居が低くなった結果、そもそも細分化した領域へのこだわりであった旧来のオタク文化の概念は変化し、単にアニメやゲームに関わることでオタクと認識されるようになった。また「オタク」情報が大量に流通・消費されるようになる一方で、主体性が弱く情報を享受するのみの受動的な新「オタク」層が大量に生み出されており、逆境の中でオタク文化にこだわっていた旧来からのオタク層や自ら発信・創作を行なっているオタク層との間で意識の乖離も生まれているという。

そのような中で、若者世代を中心に「オタクと呼ばれること・自称すること」への忌避感が薄まり、「オタク」と「一般人」の境界が曖昧になってきているようにも見える。他方で中学校や高校の30～40人前後の思春期の学生たちで構成されている学級という閉鎖的な集団内では、オタクは未だに白眼視されたり、学級内もしくは学校内で形成されるスクールカーストにおいて下位の存在とみなされてしまうこともあるかもしれない。

それでは、「オタク」と呼ばれる、もしくは自称する人は、実際自身のオタク趣味をどのように捉え、またそのオタク趣味は学校内での生活や人間関係にどのような影響を及ぼしているのだろうか。本研究ではインタビュー調査による事例研究を行う。

## 第2章 先行研究のレビュー

牧野(2018)は、中学校や高等学校の生徒間に生じる序列化現象、生徒間の秩序形成にサブカルチャーがどのように関わっているのかということをも明らかにするための研究で、「深夜アニメ」やそれらと密接な関係を持つ文化商品を選好する者を「オタク」として暫定的に定義し、14名の対象者にインタビュー調査を行うことで以下の点を確認した。

1点目は、インタビュー対象者の語りが「オタク趣味がスティグマ化され、学級内でオタク趣味を公にすることが困難だった、もしくは学級の中にオタクやオタク文化への偏見がありオタク生徒はオタク生徒同士で固まっていた」というパターンと「オタクに対する偏見は特になくオタク生徒とオタクでない生徒がそれなりの交流を持っていた」という2パターンに大別された点である。また、後者においては学級内に「文化の媒介者」と呼ばれる、マンガやライトノベルといったオタクコンテンツを大量に所持しそれらをオタク、非オタク問わず学友に貸し出すことで交友のネットワークを作る生徒が存在し、彼らの活動によってスクールカースト秩序とオタク文化の結びつきに変化がもたらされていた事例も確認された。

2点目は、オタクグループが形成された場合に、グループ内で知識量等による序列化が行われていた点である。そのため、オタクグループに所属することで学級内での序列化による競争からは解放されたとしても、競争そのものからの解放にはなり得ないのである。以下は牧野(2018)が行なったインタビュー調査でのインタビュー어의発言である。

(L氏)「グループの中でも抜群に知ってる人間は上に見られてたよ。かなわんなって思うことはあったし。どのゲームをやっていると、ゲームをやってる量によって位が左右されたってのはある。(中略)これは男性特有だと思うけど、そのグループから外されることにとてつもない恐怖心を覚えるから、必死についていこうとするんだよ。知らなくても。だから知らないふりして(ママ)後でこっそり調べたりしたゲームとかザラだしね」

(N女史)「やっぱりその、オタクでも引き出しを持ってると、それだけの人と、たぶん女子に思うの、たぶんそんな中で上下関係があるんじゃないかな。女子だとさ、もうコスプレする人とマンガとフィギュアだけする人って比べると、なんとなくコスプレする人のほうが上だって気がする。マンガ・フィギュア好きな人っていうのは少し地味なイメージがあるから、そういうので上下関係ができるってところがあると私は思うな。(中略)例えばマンガとかフィギュアばかりやっても、格好とかちゃんと今どきのブランドとか着てたりしたら、その人は上だよ。見た目が大きいかもな。オタクでも合コン行くと子供もいたし、そういう子はちょっと暗い感じのオタクの子をコケにしたり」

しかし牧野は、そうした限界はあるにせよ、オタク文化はスクールカーストに対して二重の対抗性を持っていると評価している。上で述べたように、オタク同士でかたまりグループを形成することでクラス内のスクールカーストに対抗したり、文化の媒介者の存在に見ら

れるように、オタク文化がスクールカーストそのものへの直接的な働きかけを行うレベルでも作用するだけではなく、オタク文化が学校の外、スクールカースト秩序の作用しない場にまで広がり、実践者にスクールカーストを相対化する視点を提供するという点でも、オタク文化はスクールカーストに対する対抗性を持っている、と牧野は主張している。学校外の場合がどのような場なのかは詳述されていないが、事例の中には、不登校気味にはなったもののネット上で趣味を語れる場を持つことで、オタク文化をスティグマ化し下位に位置付けるスクールカーストの秩序に絡め取られることなく自分たちのサブカルチャーを肯定的に受け止めることができたとという例があり、例えばそのようなことを想定しているのではないかと思われる。

以上が牧野(2018)のレビューであるが、それを踏まえて本稿は次のような疑問を提示する。

第一に、「スクールカースト」はそれほど強固な実在なのだろうか。牧野はオタク文化を単にスクールカーストの下位に位置付けられるサブカルチャー・スタイルとして自明視することはできないと述べており、学級内におけるオタクが必ずしも差別される対象になるとは限らないとされているが、スクールカーストの存在そのものははっきりと確認された前提条件として扱われている。先行研究でのインタビュー対象者たちは主に関西圏の出身であり、中学・高校の在籍期間は1998～2009年である。現在に至るまでの間にスクールカーストの存在や学級内の序列化に対する学生の考え方に変化が生じている、もしくは地域間でオタクに対する認識の差異が発生している可能性も否定できないのではないだろうか。

第二に、オタク趣味が時にスティグマ化し、公にしにくかったり、オタク同士が固まったりする年代にはどの程度の広がりがあるのだろうか。例えばそれは中学校から高校までをカバーするのだろうか。

先行研究が行われた時期からの「オタク」概念の変化に加え、これらの点にも注目しながら本調査を進めていきたい。

## 第3章 調査

### 第1節 調査概要

中学高校在学時にオタク趣味に傾倒していた時期のある対象者に対してインタビュー調査を行い、対象者が在籍していたクラスでのスクールカーストの状況、自身や周囲のオタクに対する考え方等について明らかにする。なお、今回は牧野が行なった先行研究を踏襲し、「深夜アニメ」やそれらと密接な関係を持つ文化商品を選好する者を「オタク」として暫定的に定義する。

### 第2節 インタビュー어의プロフィール

#### Aさん(22歳男性)

中学高校共に共学の学校に通っていた。傾倒していたジャンルはゲーム、アニメ、マンガ、ボーカロイド。ゲームはゲーム好きな父親の影響で幼少の頃から自然と触れており、小学校低学年の時に、「結界師」という作品に出会ったことがきっかけで、アニメや漫画に熱中するようになる。ボーカロイドは高校の友人に勧められたことがきっかけ。部活動は中学高校共に剣道部に所属していた。

#### Bさん(21歳男性)

中学は共学、高校は男子校に通っていた。傾倒したジャンルはゲーム、ライトノベル、アニメ、ボーカロイド、マンガ。ゲームは小学校低学年の頃から自然と触れており、アニメ、マンガ、ボーカロイドは小学校の友人から勧められたのがきっかけ。ライトノベルは中学校の別の友人から勧められた。部活動は中学高校共に卓球部に所属していた。

#### Cさん(19歳男性)

中学高校共に共学の学校に通っていた。傾倒していたジャンルはライトノベル、アニメ、ゲーム。中学一年生の時に、「氷菓」という作品に出会ったことがきっかけで、ライトノベルとアニメに熱中するようになる。中学では卓球部、高校では生徒会に所属していた。大学一年の時に「ウマ娘」に熱中し、二次創作として小説を書いてpixiv(1)に投稿するようになった。

## 第4章 分析

### 第1節 オタクの定義・境界線

Aさんの中学では、学校にアニメグッズ（クリアファイルやキーホルダー等）を持ち込むと周囲からはオタクと判断されていたという。また、高校では萌え要素（美少女キャラクター等の可愛さや性的な魅力）を強調したコンテンツを嗜好しているとオタクと判断されやすいという語りが見られた（2）。

宮崎：そういうなんかグッズとか目立つの持ってきてなければその（A：うん。）あいつはあーいうのが好きだっていう情報だけじゃいじられたりとかはしてなかったの？

A：はしない。うん。

宮崎：あーそうなんだ。そこが境界線なの？グッズというかそういう物を持ってくるかどうかみたいなのが。

A：うん。多分物だと思う。

宮崎：高校の時にこいつオタクだなんて周りから判断される基準とかってどこら辺にあったとかってわかるかな？ソシャゲ（ソーシャルゲーム）やってるぐらいじゃオタク判定されないわけじゃん。

A：ならないならないならないです。なんかかわいい女の子のゲームやってたりとか、そのマンガとか読んどったりとかしたら、オタク判定される。

宮崎：マンガって言っても色々あるけどさ。

A：ジャンルによると思う。

宮崎：萌え系の要素が強いコンテンツを好きな人とオタク判定されやすい？

A：そうそう。一般から見たら、そういうこと。二次元になってしまうんやと思う。

Bさんの場合は、中学高校共にライトノベルの所持、または深夜アニメを見ていることがオタクとして周囲から見られる条件となっていた。その際作品の知名度や内容はオタクかどうかの判定にほとんど寄与しなかったという。

Cさんの中学でも、深夜アニメを見ているかどうかはオタクかどうかの境界線だった。ただし、当時Cさんのクラスではライトノベル原作の深夜アニメである「やはり俺の青春ラブコメは間違っている」と「Re:ゼロから始まる異世界生活」の二作品が流行しており、これらの作品を視聴しているだけでは周囲からオタクと判断されることはなかったという。この基準は高校でもあまり変化はせず、マイナーな深夜アニメを見ているかどうか周囲にオタクとして見られるかどうかの境界線となっていた。

宮崎：深夜アニメを見てるとかっていうだけでオタク認定されるとかそういうことはなかったの？

C：あんまりなかったかな。多分流行りだったっていうのはある

宮崎：中学の時は、クラスの中とかでここら辺まではオタクじゃないけどここら辺はオタク、みたいなボーダーとかってどこらへんにあったかってわかる？

C：……んーどうだろう。まあでも……うーん

宮崎：深夜アニメでも、その時すごい有名なタイトルを見てるだけなら別にして感じ？

C：あーそうだね。そうそうそう。マジでそれ。『小林さん家のメイドラゴン』とか見とったらオタクじゃんやっぱり

宮崎：マイナーな深夜アニメ見てればオタクで、メジャーなやつだけだったらまあオタクじゃないみたいな

C：『リゼロ』とかはマジで流行ってたから。誰でも見てたし。

## 第2節 スクールカーストの状況

A さんによれば、A さんの通っていた中学では運動部所属の生徒がカーストの上位を占めており、オタクの生徒を下に見て差別する雰囲気があったという。具体例としては「魔法少女まどかマギカ」のクリアファイルを持ち込んでいた生徒が、カースト上位の生徒に目をつけられ、晒し上げを行うなどのいじめが発生していた。しかし、高校では統率力やコミュニケーション能力が高いことがカーストの上位に入るための条件であり、運動部や文化部といった所属している部活動はあまりカーストには影響を与えなかったという。

A：だから結構厳しかったと思う。その学校の中のそのオタクの位置っていうのは。

宮崎：割とかなり下めな感じだった？

A：うん。叩き合い。ボコられるみたいな。

また、中学と違い、高校ではオタクを下に見る風潮はほとんどなく、大体の人が自身の趣味を隠す必要が無いような雰囲気だった。

B さんの中学校も、A さんと同じく運動部所属の生徒がスクールカーストの上位を占める状況だったという。中学ではオタクであることが教室での自身の立ち位置に悪影響を与えることはなかったが、B さんの主観的な視点から見ると、サッカー部やバスケット部といったカースト上位の部活動に所属している生徒の中にはオタクはほとんどおらず、オタク趣味を持った生徒は主に下位の運動部や文化部に所属していたという。しかし、高校では部活動などによるカーストの形成はあまりされておらず、生徒のクラス内での立ち位置は賑やかで目立つか物静かで目立たないか程度の差しかなかった。また、B さんが通っていた高校では、勉強や部活、学校行事などで学校全体が何かと多忙だったためか、クラスメイトにあ



まり関心を持たず干渉もしないという生徒が比較的多く、ある程度仲のいい友人であってもお互いの趣味に関してはほとんど知らないという状況も珍しくはなかったという。

B：うーん、なんだろう。別になんか（同じ）趣味の人達が（いたとしても）俺に多分そんなに興味がなかったから。俺も周囲にあんまり興味なかったし。

宮崎：あー、さっき高校入ったら時間無くてアニメとか漫画もあんまりやらなくなったって話してたっけ。

B：それはうん、話してたね。

宮崎：その影響で、中学のときほど趣味に時間を割いてなかったってことかな。

B：うん。

宮崎：周りも似たような感じだったから、あんまり趣味での交流はなかった。

B：うん。

Cさんによれば、Cさんの通っていた中学では運動部所属の生徒を上位とするカーストは存在していたが、それほどはっきりとしたものではなく、流動性も高かったため、Cさん自身が日常生活においてスクールカーストを意識することはほとんどなかったという。また、第1節で述べたように、当時Cさんのクラスでは、一部の深夜アニメが流行していたことから、オタクに対する偏見や嫌悪感も周囲にはあまりなかった。高校では、男子と女子の比率が偏っていたこともあり、スクールカーストの存在を感じることは無かったという。

### 第3節 オタク趣味が友人形成に及ぼした影響

Aさんは、中学では主に同じ部活に所属している友人たちとグループを形成していた。Aさんがオタク趣味を隠していたこともあり、趣味は友人形成にはほとんど影響を及ぼさなかった。高校では、一年生の頃は中学同様部活のつながりが強く、二年生以降は文系と理系でクラス分けが行われ、同じ部活のメンバーがクラス内にいなかったため、クラスの中で新しく友人形成を行っていた。しかし、この時も同じ趣味の人たちが集まってグループを作るということはあまりなく、席が近いなどの偶発的なきっかけで仲良くなった後にお互いの趣味が少しずつ開示されていくという流れが主流だったという。

A：そーやね、趣味は関係してなかったかな...なんかその同じグループができてこういうのが趣味なんやって話すことはあったけど、趣味でつながるってことはなかった。

宮崎：あー、先にグループができてから趣味とかが開示されていくって感じ？

A：そうそう、そんな感じ。

Bさんは、中学高校共に部活ごとにグループが形成される場合が多く、友人形成において

趣味はほとんど関係がなかった。クラスの中で部活とは関係なく仲良くなる場合でも、仲良くなった後に趣味が開示されていくという流れはAさんと同様だった。

Cさんは、中学二年生の頃に形成された深夜アニメやライトノベルを趣味を持つ友人たちのグループに所属していた。クラスはバラバラであったが、同じ部活動に所属するメンバーが多く、卒業まで大きな変化はなかった。高校では、中学ほどクラスにオタクが多くなかったため、オタク趣味が友人形成に影響したのは最初に席が近かったクラスメイト一人だけだったという。

#### 第4節 オタク趣味について他人と語り合いたいという欲求

Aさんは、中学では深夜アニメについて語り合える友人などを作ることはできなかったが、感想を他人に話したいといった欲求はなく、一人で楽しむ趣味だと自己完結していたため、それに関して特に不満は感じることはなかったという。高校では部活内に同じ趣味を持っている友人がいたが、さらに自分から積極的に同じ趣味を持った人を探して仲良くなるという行動には至らなかった。

Bさんも、中学高校共に自分から同じ趣味を持った人を探して仲良くなるという行動は行なっておらず、仲良くなった友人が同じ趣味を持っていた場合のみ、その共通の趣味について話していた。また、中学の頃友人に誘われて共通のオタク趣味を持った人たちのSNSグループに入っていた時期があったが、友達付き合いの一環として入っただけで、趣味について語り合いたいという欲求が動機ではなかったという。

宮崎：中学の時、黙ってはいたけど、正直おんなじ趣味の人と話したいなっていうのはあった？

B：少しはあったと思う

宮崎：それがSNSのグループにつながるのかな。わざわざ他人としゃべるのに興味なかったら入らないよね

B：つながってんのかな…いや

宮崎：つながってはいない

B：ない。

宮崎：ないんだ

B：うん、たまたま話があったから…仲よくしただけで。その気持ちがあったからグループに入ったというと違う気がする。

Cさんは、中学ではクラス内に深夜アニメやライトノベルを趣味を持ったオタクが多く、自分からそれほど動かなくても趣味について語り合う相手を得ることができていた。高校では、趣味について話せる相手は減ったが、中学時代の友人たちとの関係が続いていたた

め、彼らと LINE を用いたおしゃべり等で他人と語り合いたい欲求を発散させていた。Twitter は、大学生になって二次創作を始めてから同好の士と交流するために開始した。

## 第5節 オタクグループ内部の序列関係

A さん、B さん、C さんともに、中学と高校のどちらにおいてもオタクグループ内での序列化現象が発生したという語りは見られなかった。A さんは、知識量やマンガ・ラノベの所持数が多い人が尊敬されることはあっても、少ない人が馬鹿にされることはなかったと語っており、B さんは、グループ内では好きな作品やオススメの作品を教え合っていて、その中での上下関係はなかったと語っている。以下は C さんのオタクグループ内部での上下関係に関する語りである。

宮崎：コンテンツに対する知識量とか、所持してるマンガ・ラノベの本数とか、オタク特有の基準でのカーストやグループ内の序列が発生していたことってあった？

C：なかった。みんな仲よかったし。というか、中学では重度のオタクしか集まってなかったから、そういうのは余計なかった。高校は話した通り、キモオタ系は俺しかいなかったからそういう話はしなかった。よく一緒にいたグループもオタクは一人もいなかったし。

宮崎：ガチ勢になればなるほどマウント合戦とかも発生しやすくなるイメージもあるけど。

C：いや、まあしょせん中学生なんで、アニメ見て話すくらいしかしないし、マウントもなかったかな。

## 第6節 オタク趣味の開示状況

A さんは、クラスの雰囲気が第2節で述べたような状態であったことから、中学の頃は、自身がゲームや漫画を嗜好していることはオープンにしていたが、アニメに関しては周囲に隠していた。高校のクラス内でもアニメを嗜好していることは隠していたが、同じ部活に所属している仲のいい友人たちには趣味を完全に開示していた。

B さんは中学の途中まではゲーム以外のオタク趣味を周囲に隠しており、話すのは一部の同じ趣味を持った知り合いだけだった。中学二年生の頃、自身にライトノベルを勧めてきた友人（B さん同様オタク趣味を隠していた）が周囲にオタクであることがばれてしまい、芋づる式に、普段その人物と仲良くしていた B さんもオタクであることが露見したという。その後の B さんは、自身がオタクであることを否定せずに、そのまま中学校生活を送った。高校では、自分から趣味を開示することはほとんどなく、仲良くなっていく過程での雑談で趣味の話になった時に少し開示するか、相手が自身と同じ趣味を持っていることを予め知っていた時に少し話す程度だった。

C さんは、中学高校共にオタク趣味を積極的に隠す行動は取っていなかったが、オタク趣

味について積極的に触れるのは同じ趣味の友人グループ内にいる時のみで、オタク趣味を持たない友人やクラスメイトと交流する際は、自身の趣味について自分からはあまり言及しなかった。高校に上がると周囲に同じ趣味を持つ人が減ったためクラス内でオタク趣味についてはほとんど話さなくなった。しかし生徒会のメンバーにはオタクが複数人いたため、こちらでは引き続き趣味を開示していた。大学に入ってから始めた二次創作に関しては、ネット上での知り合い以外には誰にも開示していなかった。

宮崎：ウマ娘で小説書いてるっていうのは、中学高校時代の友人には言っていたりする？

C：言っていない。

宮崎：Twitter 上での知り合いだけ？リアルの知り合いには誰もいない？知ってる人。

C：誰にも言っていない。

宮崎：結構恥ずかしいっていうの強い？オタク趣味っていう大雑把なあれよりは。

C：そういう問題ではなく……オタク趣味とはもう違うじゃん。

宮崎：より自分の内面の深いところだからこそ周りに言うのは恥ずかしいって感じ？

C：そうそうそう。流石に見せれないな、仲良い人ほど見せれない。

## 第7節 オタク趣味を隠そうとする意識

Aさんは、中学の頃深夜アニメを嗜好していることに関して恥ずかしい、他人に知られたくないという感情を抱いており、学校では完全に非開示にしていた。第1節で述べた、アニメグッズを持ち込んだ生徒がいじめられた事件があった後は、「自分もオタクであることがバレたらいじめられるのではないかと考え、より嚴重に秘匿するようになった。高校では、オタクを見下す雰囲気は消え、Aさんのオタクに対するマイナスの認識もある程度は薄くなったが、まだ仲のいい友人以外にオタク趣味を開示することには抵抗があったという。

A：あーでもなんかその可愛い女の子とか出てくる系のアニメを見とる時はこれ人にばれたらまずいやろうなくらいに思ってた。

宮崎：あーそうなんだ。周りにあんまばれたくないなって (=A：こんなの見とっていいのかなって)

A：そう。

A：まあ、中学の時はオタクってばれたら俺いじめられるんじゃないかとかって。

宮崎：うんうん。結構びくびくしてた？

A：びくびくしてたね。もう高校いってからは、もうバレても…みたいな。

宮崎：なるほど、じゃあ警戒心も下がったというか。

A：うん下がった。

宮崎：高校の時はオタクっていうのが恥ずかしいものという認識ではなかったのかな？

A：いやー、でも部活にはいいけど、クラスの人に俺オタクですっていうのは嫌だった、恥ずかしかった。

Bさんは、中学の頃は周囲からオタクであると認識されることを恥ずかしいと考えており、それが中学の前半までオタク趣味を隠す動機となっていた。高校に入ると、オタクを下に見たり、オタクがからかいの対象になるという雰囲気が消えたと同時に、Bさんの認識も変わり、周囲からの視線を気にしなくなり恥ずかしいとも思わなくなった。しかし、この考え方の変化は、オタク趣味を開示するかどうかという行動の変化には繋がらなかった。

宮崎：中学の時は、自分のことちょっとオタクだって思ってて、それも少し恥ずかしかったみたいなのも言ってたけど、高校の時って変わった？

B：変わったと思う、オタクと言われても何も思わなくなった。

宮崎：マイナスではなくなった？

B：うんそうだね、マイナスではなくなった。

宮崎：プラスではない？

B：プラスでは…ないかな、それはちょっと違う。

(中略)

B：周りも気にしなくなったし、てか周りを見ても同じよう奴らいたから、別に気にする必要もないじゃね？って。人と違うことに別に悩む必要もないなって、気づいたのと。別にみんなもおんなじ感じだなって同時に気づいたから。なんていうの、中学の時のマイナスっていうのが消えたと思う。

宮崎：環境が変わったのが原因って感じかな？

B：そうだね環境が変わって、自分自身も気にしなくなったから。両方が。

Cさんは、中学高校共にオタク趣味を隠すための積極的な行動はほとんど取らなかった。Cさんによれば、中学では第2節のような状況であったことからオタク趣味を隠す必要性が薄く、高校では周囲にオタク趣味を持つ友人があまりおらず、Cさん本人からオタク趣味について他人に話題を振ることはなかったが、特段オタク趣味を隠そうという意識が中学の頃より強まったわけではなかった。

宮崎：Cさん本人は特に困りはしなかった？自分がオタクであることを隠してなくても。

C：あんまり俺が人の目を気にしないタイプだからっていうのもあって。あとは多分、そういうのが嫌いな人からはキモって思われてたかもしれんけど。

宮崎：日常生活で困るようなことはなかった？

C：なかったね、あんまり。イジメとかはなかったかな。

C：うん、別に隠すというかそういう話題になれば……でも話題にならなかった、そもそも。だから別に自分から話すことはないというか。

宮崎：自分からこういうの好きなんだよねって言うことはないけどその話題が出たら隠しはしないって感じ？

C：まあ、そんなことでなんか言うような人でもないと思ってたし。

宮崎：じゃあ特にオタクだってばれても困ることはなさそうだなって考えてたの？

C：困ることはないだろうけどそもそも話し合わんだろうし、誰も興味ないんだったら話す必要ないって。

## 第8節 文化の媒介者

Aさん、Bさん、Cさんともに、中学と高校のどちらにおいても文化の媒介者、いわゆる自身の愛好するオタクコンテンツをオタク・非オタク問わず周囲に勧める人物の存在を確認できるような語りは見られなかった。

Bさんに中学時ライトノベルを勧めてきた友人は、自身がオタクであることをクラス内では隠しており、クラス内の非オタク層にも自身の趣味を広めようとしていたとは考えにくい。また、Cさんは中学時オタクグループに所属しながら他の非オタクグループにも出入りしていたが、非オタクグループにいる時は自身の趣味について自分からはほとんど言及しておらず、自身の愛好していたライトノベル等を彼らに勧めることはしなかったという語りから、Cさん本人が文化の媒介者の条件を全て満たしていたということはできないだろう。

## 第9節 「オタク」に対する意味付けの変化

Aさんは、中学の頃、深夜アニメなどを嗜好することに後ろめたさを感じていたという。しかし、高校では周囲のオタク趣味に対する拒否感が薄まったことにつられて、Aさん自身も「オタク趣味は隠さなければいけないものだ」というふうには考えなくなっていった。

宮崎：なるほど、じゃあオタク判定のボーダーが下がった、のかな

A：下がったっていうか、あれだね、みんな気にしなくなった。

宮崎：うーん

A：中学は知り合いも多かったから、監視社会、裏社会みたいなんで、お互い監視しあっていたみたいなどころもあるんやけど、高校はなんか人が多すぎて、個人個人に目を向けなくなったんじゃないかな。そういうオタクコンテンツに対する偏見というかマイナスなイメ

ージとかが

宮崎：偏見とかマイナスなイメージが、中学とか高校に年齢が上がるにつれて、下がったとかって言うわけではないの？

A：下がった、それも下がった。

宮崎：嫌われにくくなった？

A：うん、うん。

宮崎：中学のときとかってそういうオタクとかってだけで、結構みんなマイナスなイメージが強かったのかな。

A：…そうだね。

宮崎：うーん、高校はいったら、あいつオタクなんだ、ふーんってぐらいで済むようになった？

A：済むようになってる。

(中略)

宮崎：A 個人としては、オタクに関して、恥ずかしいとかそういうばれたくないとかの気持ちとかって中学から高校で変化したりとかってした？

A：まあ、中学の時はオタクってばれたら俺いじめられるんじゃないかとかって。

宮崎：うんうん。結構びくびくしてた？

A：びくびくしてたね。もう高校いってからは、もうバレても…みたいな

宮崎：なるほど、じゃあ警戒心も下がったというか。

A：うん下がった。

B さんは、A さんほどオタク趣味に対してネガティブな感情は持っていなかったものの、周囲の人からオタクと揶揄されることに対して恥ずかしい、煩わしいと感じていた。高校では、そういったからかわれ方をされることが少なくなったこともあり、自身がオタクであることを恥じる気持ちはなくなったという。

B：周りも気にしなくなったし、てか周りを見ても同じような奴らいたから、別に気にする必要もないじゃね？って。人と違うことに別に悩む必要もないなって、気づいたのと。別にみんなもおんなじ感じだなって同時に気づいたから。なんていうの、中学の時のマイナスていうのが消えたと思う。

宮崎：環境が変わったのが原因って感じかな？

B：そうだね環境が変わって、自分自身も気にしなくなったから。両方が。

C さんは、中学時点からオタクであることに対して恥ずかしいなどのマイナスの感情はあまり持っておらず、オタクが嫌いな人から自身が嫌われることも、「まあしょうがない」と割り切って考えていた。その考え方は高校に入ってからあまり変化はせず、たまにオタ

クであることを揶揄われることはあっても、それに対して思い悩んだり深刻に捉えたりすることはなかったという。



## 第5章 考察

### 第1節 「オタク」概念の境界線

「オタク」と「非オタク」の境界線は、必ずしも同年代の人々全員が共通して持つ普遍的な観念ではない。第4章第1節でも述べたように、Aさんの中学では学校にクリアファイルやキーホルダーといったアニメグッズを持ち込むこと、高校では萌え要素の強いゲームやマンガを嗜好することが周囲からオタクとして判断される条件であり、Bさんの場合は中学高校共にライトノベルを所持、もしくは深夜アニメを視聴していることがオタク判定される条件だった。一方で、Cさんの場合は中学で「やはり俺の青春ラブコメは間違っている」や「Re:ゼロから始まる異世界生活」といった一部の深夜アニメが流行していたため、これらを視聴しているだけではオタクとは認識されず、よりマイナーな深夜アニメを視聴していることがオタク判定の条件だった。

このように、ほぼ同年代である調査対象者の語りにもそれぞれ違いがあり、「オタク」が一枚岩の概念ではないことがわかる。つまり、「オタク」という概念それ自体が語り手によって特徴的に意味付けされるものであるため、語り手がどのように境界線を引くのかに注意する必要があるのだ。現に、Cさんは自身の愛好するコンテンツの二次創作というオタク活動の中でも代表的と言える活動を行っているにも関わらず、「二次創作はオタク趣味とはもう違う」と語り、アニメを見たりマンガを読む、ゲームをプレイするといった行為とは全く別の括りで捉えていた。

### 第2節 スクールカーストの実在性

アニメグッズを学校に持ち込んだ生徒がいじめられたり、運動部所属の生徒がクラス内での中心的な立ち位置を確保していたりと、牧野(2018)において前提条件として語られていた「スクールカースト」は、本調査対象者の場合、中学生時点での語りに関しては、概ね似通った学生間での序列化現象として存在が確認された。しかし、第4章第2節では、3人それぞれが、高校では中学とは雰囲気が変わり、クラス内の序列が曖昧になったと語っており、先行研究や本調査の中学生時点の結果と類似の構造は確認できなかった。AさんとCさんの高校では、文理分けの影響でクラス内の男子の人数が少なく、カーストのようなものはほとんど感じなかったと語っており、Bさんの高校では、クラスメイトにあまり関心を持たず干渉もしないという生徒が比較的多く、ある程度仲のいいという友人であってもお互いの趣味に関してはほとんど知らないという状況も珍しくはなかった。

また、第4章第3節の結果から、新しい友人関係の形成にオタク趣味はあまり影響を与えていないことがわかった。AさんやBさんは所属する部活が同じであったり、クラス替えの際に席が近かったなどの偶発的なきっかけから友人形成が始まり、趣味の開示は相手がある程度信頼してから行われると語っていた。中学で深夜アニメやライトノベルを嗜好す

るオタクのグループに所属していた C さんも、オタクグループが形成されたのは同学年の生徒たちがある程度打ち解けあった中学二年生の頃だったと語っており、お互いのことをほとんど何も知らない初対面の時点ではオタク趣味を開示してはいなかった。

さらに、牧野 (2018) ではオタクグループ内部でもスクールカーストと同様の序列が発生するとされていたが、第 4 章第 5 節で述べたように、本調査ではそのような語りは見られなかった。その原因として、「オタク」の定義が広まり、マニアとしての要素が薄まったことで、知識量や収集量の多いものが上位という価値観が発生しにくくなっている可能性が考えられる。

### 第 3 節 「オタク」のスティグマ化

第 4 章第 2 節と第 3 節で述べたように、牧野 (2018) にて確認されていたオタク趣味がスティグマ化する事例は、調査対象者の中学時の語りにて確認された。A さんはクリアファイルなどのアニメグッズを学校に持ち込んだクラスメイトがいじめられるのを見て、自分もオタク趣味を持っていることがバレたらいじめられるのではないかと考えていたと語っており、B さんもクラスメイトにからかわれるのが嫌でオタク趣味を隠していたと語っている。

ただし、第 4 章第 7 節と第 9 節で述べたように、中学と高校でオタク趣味を“言わない”ことの意味内容にも違いが生じていた。A さんや B さんが中学でオタク趣味を開示しなかったのは、いじめられたりからかわれたりするリスクを回避するためであったり、オタクコンテンツを愛好する自分に対する恥ずかしさといった、周囲や自身からオタクコンテンツに向けられるまなざしが大きな要因だった。それに対して、高校でオタク趣味を開示しなかったのは、オタク趣味に限らず趣味そのものが友人形成に影響を与えにくくなったことが要因であるように見える。つまり、「恥ずかしい、もしくは学校生活内で不都合が生じるから開示しない」から「共感してもらえない趣味の話をして意味がないから開示しない」に、趣味を開示しない理由が変化しているのだ。第 4 章第 9 節での A さんの「高校ではいじめられるリスクが下がったから、もうオタク趣味がバレても構わないと思った」という語りや、B さんの「環境が変わったことがきっかけで、他人と違うことに悩む必要はないと気付いた」という語りからは、中学から高校に進学する過程で、個々人の自身とは異なる文化や価値観への不寛容さが減じたように感じていることが伺える。それが開示しやすさに影響したと言えるかもしれない。とはいえ、高校では周囲及び自身のオタクコンテンツに対するマイナス意識が改善されたという語りもあったものの、親しい友人以外へのオタク趣味の開示状況にはそれほど影響を及ぼしていない。

これに関連して、同じく牧野 (2018) にて確認されている「文化の媒介者」は、存在する条件として挙げられていた「オタクに対する偏見は特になくオタク生徒とオタクでない生徒がそれなりの交流を持っていた」を満たす C さんの中学においても、存在を確認することはできなかった。これについては、次の 2 つの可能性が考えられる。第 5 章第 1 節でも述

べたように、「オタク」の捉え方が多様化し、オタクと非オタクの境界線が以前と比べて曖昧化している現在では、オタクと非オタクの間の橋渡しの役割を担っていた文化の媒介者は、必要意義が薄れたことで存在が潜在化し、外部からの観測が難しくなっているのではないだろうか。第4章第1節で述べた、クラス内で深夜アニメが流行っていたCさんの中学のような状況であれば、元々深夜アニメやライトノベルといったサブカルチャーを嗜好していなかった人にそれらを勧める人がいたとしても、その存在がクラス内で浮き彫りになるとは考えにくい。

もう1つの可能性としては、第4章第3節で述べたように、趣味の開示はお互いにある程度心を許しあってから行われることが多いため、自身の嗜好するコンテンツを他人に勧めるという行為も、嫌われたり鬱陶しがられるリスクを回避するため、新密度の高い友人間でしか行われたいのではないだろうか。中学生や高校生が自身の趣味を開示する行為に慎重になったことも、文化の媒介者の存在が観測しにくくなった一因なのかもしれない。

## 注

(1) イラストやマンガ、小説が投稿される日本最大級の創作用 SNS

(2) あくまで男性オタクに対する基準であり、女性オタクがどのようにしてオタクと定義されているかは A さんの語りでは言及されていない。

## 参考文献

・牧野宏紀, 2018, 「学級内における対抗文化としての「オタク文化」」 奈良大学大学院研究年報(23), 25-37

・渡邊秀司, 2014, 「オタクの言説：外部との「緊張感」を考えるために」 佛教大学大学院紀要(42), 37-54

・菊池聡, 2000, 「「おたく」ステレオタイプと社会的スキルに関する分析」 信州大学人文科学論集人間情報学科編(34),63-77